

申請者	学科名	保健福祉学科	職名	助手	氏名	松田 実樹 印
調査研究課題	床からの抱え上げ介助に着目した身体的負担の少ない生活支援技術に関する基礎的研究.					
交付決定額	20,000円					
調査研究組織	氏名	所属・職		専門分野	役割分担	
	代表	松田 実樹	保健福祉学科・助手	介護福祉	実験、分析、執筆	
	分担者	谷口 敏代	保健福祉学科・教授	介護福祉	実験、分析の指導	
		原野 かおり	保健福祉学科・准教授	介護福祉	実験、分析の指導	
		趙 敏廷	保健福祉学科・講師	介護福祉	実験	
佐藤 ゆかり		保健福祉学科・助教	認知症ケア	実験		
調査研究実績の概要	<p>本研究では、床からの移乗介助における効果的な生活支援技術の検討を行うために、床からの移乗介助方法の違いによる①生理学的側面に及ぼす影響と②精神的側面に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。現在、介護の専門職養成において移乗介助の手技に裏付けられるエビデンスとしては、「こころとからだのしくみ」や「生活支援技術」でボディメカニクスの活用という観点から教授されている。しかしながら、実際のテキストにおいては「介助者は利用者のからだになるべく近づく」「自分の介護しやすい高さにベッドを合わせる」といった抽象的な表現で表記されており、個人レベルで異なる安楽な介助姿勢が何によって確定されているのか具体的に明らかでない。一部の先行研究では、移乗時の車いすの角度や下肢の用い方が明らかにされているが（住居2005, 伊丹2004）、得られた知見が教育や現場に還元されていない現状がある。そのため、現在もなおエビデンスに裏付けられた生活支援技術の必要性が高まっている。そこで、本研究において負担の少ない安全で効果的な移乗介助方法を明らかにすることは、介護現場で困難を感じている「専門職育成」や「介護負担」事象との重なりから考えて、臨床からのニーズに応えやすい点や生理学的指標を用いた技術研究が少ない面からも発信力のある知見が得られるという点で十分な特色があると考え。研究対象者は介護福祉コース学生25名である。移乗動作</p>					

<p>調査研究実績の概要</p>	<p>は、床に臥床している介護用人形をリクライニング車椅子まで3回移乗介助するようにし、それを1セットとした。対照群には自己流で移乗介助を行うよう指示し、実験群には職場における腰痛対策指針の介護作業姿勢を基に①片足を前に出して膝を曲げ、利用者（介護用人形）を抱えて立位をとる方法（以下、片膝と略）と②膝を曲げ、大腿部上に利用者を一度抱えた上で立位をとる方法（以下、両膝と略）を各グループに分け、書面及び映像により方法を提示して実施するよう指示した。1セット目は3グループとも自己流により実施し、2セット目は対照群と実験群とに分けて移乗介助を行い、同グループによる1回目と2回目の群間比較と、他グループ間の群間比較を行った。評価指標は①生理的尺度として、支援中の心拍数及び心拍変動を②精神的尺度としてBorg Scaleを用いた。生理的尺度の測定にはワイヤレス生体センサーRF-ECG（GMS社製）を使用し、心拍変動解析にはMemcalc/Bonaly Lightを使用した。腰部における主観的負担感としては片膝と両膝を床に接触させ、移乗動作を行ったグループ（片膝及び両膝）で1回目よりも2回目の方が負担感の軽減がみられた。一方で、自己流により2回とも実施したグループでは、負担感の軽減は見られずに逆に負担が増加していた。また、身体全体における主観的負担感としては、全てのグループにおいて1回目よりも2回目の方が負担感の軽減が見られた。しかしながら、主観的負担感については統計的に有意な差は見られなかった。生理的尺度による負担感としては、1グループ（自己流×自己流）及び3グループ（自己流×両膝）による移乗動作の実際で、1回目に比べて2回目の交感神経の値が上昇していた。一方で、2グループ（自己流×片膝）による移乗動作の実際では、一回目に比べて2回目の交感神経の値が低下していた。また、各グループ間での床からの移乗における身体負担の影響を分析するために、分散分析を行ったが、統計的に有意な差は見られなかった。現在、生活支援技術における移乗動作については積極的に福祉用具の導入がされ、リフトの活用が推奨されるようになっている。しかしながら、リフト活用の適合とまらないケースも存在し、自動化や省力化が望めない場合は現場での労働衛生教育が必要となる。労働者に作業姿勢や動作について適切な方法の教示が求められるが、専門職の養成教育段階で根拠となるようなデータがなく、適切な作業姿勢での介護動作がされない為に、介護職員の腰痛予防対策は大幅に遅れているとも言える。引き続き福祉用具の活用によって身体的負担の軽減を図ることが求められてくるが、人力での介護をしなければならない状況となった時、実践上で biomechanics を活用しながら介護者自身の体を保護できるよう抽象的な表現ではなく、具体的に片足を前に出して膝を曲げた態勢を取ることで負担が少なく移乗動作が行える傾向にあるということを専門職教育内で紹介し、支援時における有効な身体の使い方の習得を福祉用具利用と並行して学ぶ仕組みが大切になってくると思われる。</p>
<p>成果資料目録</p>	